

漱石先生 大いに笑う

半藤一利





ちくま文庫

漱石先生 大いに笑う

二〇〇〇年五月十日 第一刷発行

著者 半藤一利 (はんどう・かずとし)

発行者 菊池明郎

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三 ㊦ 一一一―八七五五

振替〇〇一六〇―八―四二二三

案内 〇四八―六五一―〇〇五三 (サービスセンター)

装幀者 安野光雅

印刷所 三松堂印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

© KAZUTOSHI HANDO 2000 Printed in Japan

ISBN4-480-03561-3 C0195

文庫

漱石先生 大いに笑う

半藤一利



筑摩書房

目次

前口上 9

「春雨に」の巻

落語的世界	12	柳は緑花は紅 くれない	46
欠伸 あくび うつして	16	へりオトロープの香り	52
椿 つばき と虻 あぶ	22	色っぽい話	61
寒山拾得 かんざんじつとく	26	仙人のこと	66
眠りたがり屋	32	占い好き	72
馬上ゆたかに	35	木瓜 ぼけ 咲くや	80
能坂長範の功績	41		

「夏雲と」の巻

銭湯の熱さ 86

廁半ばで 90

雨と傘 95

国技館へ行く 101

虱しらみの行く方 108

白いハンカチ 111

愛用のハカマ 116

五月の蠅はえだ 120

紅旗征戎こうきせいじゆうは…… 125

月並調とは 128

たわけな俳句群 135

無人島の天子 144

「秋風や」の巻

別れは方言で 150

銀杏の葉 154

三重吉の酒 158

『それから』の献酬 162

「冬の夜は」の巻

無筆なれども 165

趙州無字 ちようしゆう 166

無法無天 170

色なき風 172

砧を打つ きぬた 178

窓いろいろ 181

鹿ヶ谷事件 しかがた 184

一人を吹くや 189

白雲の境 194

熊本の旅 198

天からの便り 204

海を渡る達磨 だるま 207

鶴に生れて 212

正客となるの記

くしゃみに非ず

218 214

老いということ 222

四十七士 せつちんづめ 224

雪隠詰と都詰 みやこづめ 229

地獄について 233

原稿用紙の話 235

風蕭々として^{しやうしやう} 240

博士号辞退 248

帯泥棒その後 244

後口上 257

参考文献 259

「漱石俳句」索引 260

解説 半藤先生も大いに笑う、
ここに十七句を献上いたします

嵐山光三郎 269

漱石先生 大いに笑う

本文イラスト 著者

前口上

一九四九年（昭和二十四年）六月号の「文藝春秋」に「天皇陛下大いに笑う」という座談会が掲載された。サトウハチロー、辰野隆、徳川夢聲むせいの三人が昭和天皇の前で「バカばなしをして、陛下はうまれてはじめてお笑いになった」という。その暢気のんきな座談が再現されて、雑誌に載ったのである。

これが端緒となつて、この雑誌は急発展して今日のような大きな影響力をもつものになった、というのがいい伝えになっている。

まことに景氣のよろしいこの伝説にあやかつて、本書のタイトルをつけた。写真などで拝見するようにいつも謹厳真率しんそつである漱石先生を、太平楽なはなしを一席弁じますことで大いに笑わせてみよう、という趣向なのである。

しかも当の御大おんたいの発句ほくをタネにしてのうのとやろうというのであるから、雑誌の神懸りかみが的な手柄ばなしであろうと信じないことには、とても不安でやってはいられない。

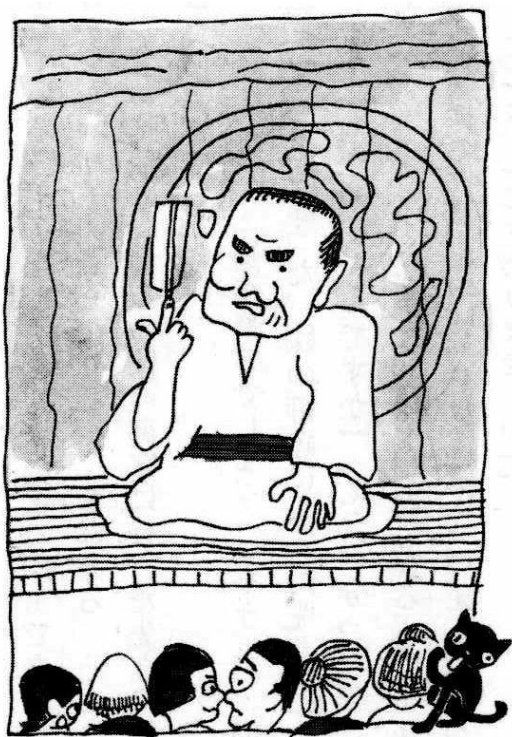
漱石先生がはたして如何なる笑いをうかべるや。わたくしはかならずや大笑いするものと

確信したのである……。

そしていくらかの自負をもっていえば、漱石俳句が主題のものであるが、本書は批評・鑑賞とかの狭つくるしいものではない。読者はもっとひろく、楽しい漱石俳句をきっかけにして諸事百般・森羅万象しんらばんじょうのいろいろな事柄について考え、ふたたび俳句に帰る、ついでに漱石の人となりや文学について友達づきあいができる、そんな大それた狙いも本書は意図している。

「春雨に」の巻

漱石が好んだ三代目柳家小さん（顔は岡本一平画より）



●落語的世界

『吾輩は猫である』の主人公の猫が、惚ほれている三毛子みけこをたずね、三毛子の飼主である二絃にげん琴きんの御師匠さんの「もとは身分が大変好かった」話を聞くくだりが、二章にある。そこに有名な吾輩と三毛子の会話が展開される。「天璋院てんしょういん様の御祐筆ゆうひつの妹の御嫁に行つた先きの御つかさんの甥の娘」といわれて、吾輩は目を白黒させる。

『「よろしい分りました天璋院様でしょう』『ええ』『御祐筆でしょう』『そうよ』『御嫁に行つた』『妹の御嫁に行つたですよ』『そうそう間違つた。妹の御嫁に入つた先きの』『御つかさんの甥の娘なんですと』『御つかさんの甥の娘なんですか』『ええ。分つたでしょう』『いいえ。何だか混雑して要領を得ないですよ。詰る所天璋院様の何になるんですか』『あなたも余つ程分らないのね。だから天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行つた先きの御つかさんの甥の娘なんだつて、先つきつから言つてるんじゃないやありませんか』』

これでは猫のみならず読んでいるほうも、何だか混雑して要領をえない氣持になつてくる。そしてどこかで聞いたようなやりとりと氣付く、とすれば、その人はかなりの寄席通よせつうということになる。まさしくこれは小林信彦氏が書くとおりであります。

「この会話は、落語における隠居と与太郎のチグハグなやりとりの巧みなヴァリエーションであり、漱石が落語的会話の呼吸をいかに身につけていたかを示している」（『小説世界のロビンソン』新潮文庫）

江戸ッ子漱石が幼いころから寄席ファンであったことは、すでに多く書かれている。祖父直基は名代の大酒呑みの道楽もので、夏目家の身代を一代で蕩尽した上に、料亭で頓死した人物。父の直克も若いころは同様の遊び好きで、なじみの芸者に当時は高価の縮緬の夜具を贈ったりした。三人の兄たちがこれまたそろって粹狂人で、末ッ子の漱石を子供のころから神楽坂あたりの寄席によく連れて行つた。兄たちは家では声色やシロウト落語の一席を競演したりした。幼年時代から周囲がこの調子であるから、長じても漱石がみずからしばしば寄席へ通つたのは、自然の流れというものである。

学生時代に、松山出身の正岡子規と知り合うきっかけとなつたのも、寄席愛好という共通項があつたからであつた。連れだつて日本橋の伊勢本という寄席に通つたことは、文献などからはつきりしている。明治二十三年一月某日の漱石の子規宛ての手紙がある。

「当年の正月は不相変雑煮を食い寝てくらし候、寄席へ五、六回程度参り、かるたは二返取り候。一日神田の小川亭と申にて、鶴蝶と申女義太夫を聞き、女子にてもかかる掘り出し物あるやと、愚兄と共に大感心、そこで愚兄余に言う様『芸がよいと顔迄よく見える』と、其当否は君の御批判を願います」

と寄席への耽溺^{たんでき}ぶりをむきだしにしているし、また、二十四年七月九日の子規宛ての手紙でも、歌舞伎座へ出かけたことを報告し、

「一軒おいて隣りに円遊^{えんゆう}を見かけしは鼻々、おかしかりしな、あいつの痘痕^{あばた}と僕のとを数にしたらどちらが多いだろうと大いに考えて居る内、いつしか春日局^{かすがのつばね}は御仕舞いになりぬ」

と落語家三遊亭円遊を見かけたことを至極嬉しがって、円遊が大きいことで売りものの鼻のグジャレをとばしている。

若き日の漱石はこの「鼻の円遊」を鼻^{ひな}真にして、楽しんで聞いていることは『三四郎』にでてくる。円遊が珍芸ステコ踊りで人気をとり真打ちになったのが明治十五年、その人氣が絶頂であったのが明治二十年代の前半というから、漱石の寄席がよいのかんであった十五歳から二十四、五歳に当る。それにしても江戸いらいの人情^{ばなし}噺が尊重され寄席の主流であったときに、結局はおふぎの垂流でしかなかった円遊の滑稽落語にソッポを向かずに一般の人びとと一緒に楽しんだところに、漱石の漱石らしいところがある。

興津^{おきづ}要教授が「漱石と江戸文化」（朝日ジャーナル誌）にいうように、そんな漱石の寄席好き、というか落語好き円遊好みの、いちばんよく示されているのが『吾輩は猫である』ということになる。好きな円遊をそのままちこんで、「心臓^{しんぞう}が肋骨^{ろつこつ}の下でステテコを踊り出す」とやったり、寒月^{かんげつ}が演説の稽古をするくだりで「弁じます」といつて冷やかされるのは円遊の口ぐせの応用で、「二席弁じあげます」と彼ははじめたのである。金持の金田夫人を

鼻子としたのも鼻の円遊からの連想であろう。

そしてもちろん句にも詠よんでいる。

・円遊の鼻ばかりなり梅屋敷

明治三十二年、熊本での作。時間も距離もすっかり遠くなつていても、くるりと尻をまくり、紺はんももひの半股引き、うしろ鉢巻をすると、へ向こう横丁のお稲荷いなりさんへ……とやおら歌いながら踊りだした円遊のことが、やっぱり忘れられなかったのである。

というわけで、落語好きの漱石が書いたさきの三毛子と吾輩の「天璋院様の御祐筆の……」をめぐるチグハグな会話にもどると、ここから落語好きなら、自分好みの高座の主人公を思いうかべることであらう。小林信彦氏のいう隠居と与太郎はもちろんのこと、「寿限無」の檀那寺だんなでらの和尚おしょうと八五郎を指摘する人も多いにちがいない。

諸説あるなかで、快著『漱石と落語』（彩流社刊）の水川隆夫氏（京都女子大学教授）がいう「錦明竹きんめいちく」が、もつともよき連想と、わたくしなんかは判定する。「京橋中橋の加賀屋佐吉方から参じました」使いのものが、早口で長い長い口上を申しのべる。

「……自社は黄檗山おうはくさん錦明竹、ズンドの花活はなわけには遠州宗甫そうほの銘がござります。利休の茶杓ちやしやく、織部の香合こうあわせ、のんこの茶碗、古池や蛙飛び込む水の音、これは風羅坊正筆ふうらぼうの掛物、沢庵木庵いん隠おひ元げん禪師張り交ぜの小屏風……」

聞いている与太郎も、奥から出て来た女房もさっぱり訳がわからない。節まわしが面白い